

尊敬すべき人

美作市立作東中学校

一年生 山口 葉月

私の父は「ほのぼのハウス農場」という農場を経営している。

二〇一三年、私が二歳の時に景色が良く、農業をする気候や土壌に適している作東地域に兵庫県から移住してきた。それからこつこつと農場を作り、今ではたくさんスタッフの方が働いている。農場全体の広さは約一五〇〇アール、周りは山に囲まれている。鹿・たぬき・きつねなど多様な動物が生息している。そういえば、この前農場の近くの森で栗を食べている猿を見かけた。

父には農業仲間が全国にいるらしい。野菜の害虫、病害虫、新しい品種、販売先、マネージメントなどの情報を共有し合っている。年に何度か会って親睦を深め、様々な困難を共に乗り

越える仲間だそうだ。

春はじゃがいも、夏は玉ねぎ、秋はさつまいも、冬はかぼちゃの出荷に力を入れている。年間で約一二四、五トンを出荷している。

出荷先は、コープ、マルイ、マルナカ、イオン、湯郷ホテル、バレンタインホテル、全国各地のレストランや八百屋、ふるさと納税の返礼品などらしい。意外と身近なスーパーマーケットにも出荷していると知って驚いた。もしかしたらあなたも父の野菜をどこかで食べたことがあるかもしれない。

父はテレビや新聞などの取材をたくさん受けている。例えば、テレビせとうち、OHK、RSK、みまちゃんネルという地方のテレビ、山陽新聞、毎日新聞などだ。父が出ているニュースを家族で見ることがある。恥ずかしい気持ちもあるけれど、毎日必死に仲間と農業をしている父をたくさんの人に知ってもらえて嬉しいという気持ちで見ている。農業をするときの父はとても一生懸命で、楽しそうに私には真似ができない。

十一月ごろのある日、部活から帰ってくるとなぜかそら豆の種まきを手伝うことになっていた。最初はめんどくさいなど思いつつも一粒一粒丁寧に父の言ったとおりにまいていった。

一歩進んでは種を落とす、もう一歩進んでは種を落とすという地道な作業の繰り返しだった。足早にどんどん種をまいていく。でも、だんだん疲れてきて足取りが重くなってきた。最初の一行を全てまき終わったときには、どっと疲れが押し寄せてきた。あと何列まかないといけないのだろうか。暑さと疲れで熱中症気味だった。

一度水分を取って休んだ。休むと少しやる気がでてきた。あともう一列まこうと思い、二列目に足を踏み入れた。まいてまいてまいて、やっと二列目が終わった。ぱっと顔を上げると辺りは薄暗かった。集中して種をまいていたんだと思った。隣を見ると、まだやめずに黙々と種をまき続けている父の姿があった。その父の顔は全く疲れていなくて、むしろ楽しそうに見えた。種をまいているときの私の顔とは全く違った。そんな父の顔を見て、なんでこんな顔ができるんだろうという思いでいっぱいになった。そして、父の顔を見ることによって私からめんどくさいという気持ちが消え、達成感が溢れ出てくるのだった。私にとって大変だと思ったことを、父が楽しそうにこなすことができるのは、苦勞することや難しいことが他にあるからだと思います。それが何か、改めて父に聞いてみると、

「虫に食べられて一生懸命育ててきた野菜が収穫できなくなる。あとは地球温暖化で野菜が育たないことに悩んだりしているよ。でもお父さんには昔から一つも変わらない農業に対する思いがある。だから楽しく仕事ができるんだよ。」

と言った。世界で飢餓が増える中で、日本国民に安心安全な野菜を食べられる人が増えてほしい。地球温暖化からくる食糧不足を少しでも無くしたい。野菜を食べられなかった人が自分の作った野菜を食べて、野菜ってこんなに甘くておいしかったんだって喜んでもらいたい。このような思いがあって父は、毎日必死に、だけど楽しく農業と向き合っている。そして、中四国はもとより能登半島や沖繩の人々に約一トンの野菜を寄付しているそうだ。

同月、私にとってビッグニュースがあった。それは、いつもの学校給食に父の野菜が出ることだ。父は、子供たちに美作の自然からこんなにおいしいものができるんだと知って喜んでほしい、という思いで作東給食センターと美作給食センターに野菜を寄付している。父の野菜を食べた友達が「おいしかった。」とか「もっと食べたい。」と言ってくれたときには自分の事のように嬉しかった。帰ったらそのことを父に報告しようと

思った。

私は、父が農業に対する思いを変えずに、夢を持って毎日必死に働いていることを知っている。だからこそ野菜が苦手な人に、一口でも食べてほしいと言いたい。そして、自分も野菜に限らず、どんな食べ物でも作ってくれた人に感謝して食べたい。

私が父から学んだことはたくさんある。その中で一番大きな学びといえるのは、面倒くさいなと思ったことでもやってみると、終わったときに達成感があふれて結構楽しかったな、と思えることだ。

私は父のことを凄い人だと思っていた。それは今でも変わらない。けれど、最近は尊敬すべき人であると思うようになった。父のように何事にも必死に、楽しく仕事をできる大人になりたと思う。だから、これからは面倒くさいと思うことも率先してチャレンジしていきたい。